

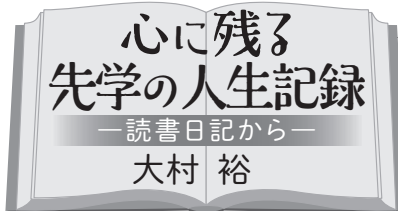
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.187  
2019.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第9回

## 『井尻正二選集 7. 随想』

(大月書店 1982年)

今回紹介する井尻正二は、考古学の世界では野尻湖発掘調査を組織的に展開し(大衆発掘方式)、「旧石器時代」の生活や自然環境などを解明した化石研究者として著名である。学問に「イデオロギー」を持ち込む傾向があったとの批判も根強いが(廣重徹「戦後日本の科学運動」中央公論社 1960年)、氏の著作に記載されている在野研究者としての生き方や「団体研究」の運営手法、及び教師としての心構えは、私が常日頃考えていることと通じるものがあり、非常に親近感を覚える学者である。

井尻(1913~1999年)は東京神田明神裏で出生。動物学者として著名な谷津直秀は大叔父にあたる。古生物学に進んだのはこの大叔父の影響が大きかったと回想している(「三人の恩師」)。生まれつき「虚弱児童」で「とても中学校へは進まれない」、と医師に断定されていたそうである。近所でも評判の泣き虫であったようであるが、その理由は、理屈に合わないことに対してはあくまで反抗し、納得のゆくまで理由を追求してやまない、という性癖による。幼稚園から小学校に進むに従い、その反逆精神は教師に対する反抗、教師の言動の不合理に対する闘争となって現れてくる。また小学校の先生が特定の子供(上流家庭の子供)を、えこひいきする態度に対しては猛烈にくっついてかかったという。とは言え学業は優等で、中学三年までは、病弱ながらも秀才として評判であったようである。しかしこの頃、民政党政治家の父親の影響で政治的関心が高まり、マルクス主義の文献を味わった結果、無味乾燥な学校の教科書に没頭することが出来なくなってしまったのであった。他方、大叔父の影響を受けた母の指導で動物学にも強い関心を持つようになったため、学業の方はますますお留守になってしまう。学校の成績が悪くなると誰しも学校生活が面白くなくなる。それで中学校4年生の三学期を無断欠席して上京し、神田の研数学館に通い、高校受験の勉強を始めたのであった。そして首尾よく府立高等学校の理科乙類に入学。中学校は「番外修了」となり、落第を免れたという。しかし待望の高校生活も種々の葛藤に苦しみ、「憂うつ」のどん底であったようである。しかも3年生の時に父親が多額の借金を残して急逝。経済的に困窮し、家庭教師をしながら学業を続けることになるのである(「入党の記」)。

高等学校卒業後は、谷津直秀の勧めにより東京帝国大学地質学科に進学し、古生物学を専攻するが、この大学も井尻の性に心底合わなかったらしい。「最後の大学にいたっては、これまた最低で、こんちきしょうと思った教授に接した以外に、学ぶべきものはあまりありませんでした」と回顧している(「教育とは」)。そもそも井尻は権威主義が大嫌いで、旅館の宿帳の職業欄に「大学教授」と書いてあるのを見ると、「ゲーッとなって、そ奴の面が目に浮かぶ」と嫌悪を露わにする人なのである(「旅と宿帳」)。

地質学科に入ってから、鉱山や炭鉱のなまなましい現実世界(おそらく苛酷な労働環境)に触れ、社会の矛盾とどう対峙すればよいのか悩み続ける。また、化石の会(東京帝大の古生物学・地質学研究者の談話会)において、唯物論の立場で研究を進めることが原因となり、「赤」の刻印を押され、主任教授と衝突。大学院を二か月で中途退学してしまう。その後は東京国立科学博物館に勤め、論文執筆(『古生物学論』平凡社 1949年。1954年に『科学論』と改題されて理論社から再刊)に集中する。終戦後は、伊藤律に誘われて日本共産党に入党(入党の記)。1947年には「地学の団体研究」・「学会の民主化」を旗印とした「地学団体研究会」(「地団研」)の創設に関わり、地学知識の普及と多数の初等中学校教員の組織化に尽力するが、レッドパージにあって国立科学博物館の職を追われる。その後は著述業に専念する傍ら、法政・早稲田・群馬大学などの講師を勤めている。1963年には東京経済大学の教授となるが、わずか6年で退職。その理由は「教授会とよばれる妖気にみちた大学運営の組織」に対する反発であったという(「教育とは」)。壮年になっても反骨精神旺盛な人柄であった。

井尻にまつわる面白いエピソードは尽きない。まず考古学研究者も心しなければならぬマスコミ対応について紹介しよう。ある化石が発掘されたからと、電話でそのニュースバリューを確かめるために記者が電話をかけても、「私は駅前のソバ屋ではありません」と、にべもなく電話を切るそうである。化石そのものを見せてくれるわけでもなく、どんな地層から発掘されたのかも、電話では確かめようがない。それなのに「その化石は…」と、もっともらしい返事のしようがない。だから「こちらは、駅前のソバ屋さんではありませんから、電話一丁で出前はできません」と断るのだそうである(上田融「駅前のソバ屋さんではありません」『井尻正二選集 月報7』1982年)。研究者としての真摯な姿勢を強く印象付けるエピソードである。また、井尻は、自らを「先生」と呼ばれるのを好まない。ある友人の奥さんが、なにかの会合の帰りしな、「井尻先生」と呼びかけたら、井尻は、やおら道端にしゃがんで「先生! オシッコ」と叫んだそうである。以後その家族の中では井尻を「先生」と呼ぶことが禁句となったという。関東ローム研究グループによるフィールド調査の帰り途には、必ずといってよいほど池袋の井尻邸に皆で立ち寄り、「歌と踊りのドンチャン騒ぎ」をしている。ひどいことに、井尻の蔵書の一部を庭に持ち出して燃やしてしまったり、書棚に小便をかけたりするなどの狼藉を働く者もいたという(藤田至則「池袋大学で」『井尻正二選集 月報8』1983年)。そんな無礼者に対しても後日こたわりなく接するのであるから、かなりの大物と言わなければならない。なお、井尻は奥さまに対し「ソクラテスの女房」などと悪態をついているが(「結婚の条件」)、夫を経済面から支え、しかもこんなヤンチャな連中をいつも快く応接していた献身に対し、心からの敬意を表したい。

\*巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第9回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第180回) 平井耕平 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第6回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「中国陶瓷見聞録」 岡田章一 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第6回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

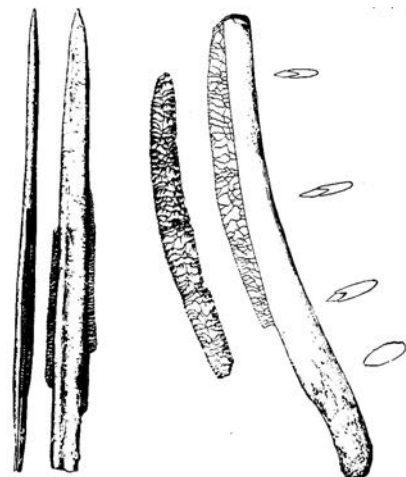
## 6. 無土器文化の終末と縄文文化の起源

エジプトでの発掘に参加した帰途1963年の真夏を日本で過ごして8月末にトロントに戻った。9月に新学年が始まると、新任助教授のフィリップは講義や会議で忙しい一方、3歳になったダグラスは保育園に通いはじめたので、私はエジプトから届いた発掘品の整理をしながら、日本の考古学研究の現状などについて国外から見た印象を学会で発表したり雑誌に投稿するためにまとめたりはじめていた。翌年の1964年からは私も非常勤講師としてトロント大学人類学科で授業を担当することになる。

杉原壮介先生、芹澤長介先生をはじめとして日本滞在中にお目にかかった研究者の方々からは帰国後も出版物、新聞切り抜きなどお送り頂いたり、有望な遺跡を発掘する計画、その進行状況や、成果の速報などお知らせいただいた。そういった通信の多くはこちらから差し上げた書簡のカーボンコピーと一緒に自宅のファイル・キャビネットにいまも残っているが、そのような通信の日付けをくらべてみると、インターネットのなかった時代の航空便の集配は今より迅速だったように思われる。

私に関心をもっている旧石器関係の話題のうちで当時特に活発な論議の交わされていたのは日本列島本列島における旧石器時代の始まりと終わりに関する新資料や解釈、要するに(1)“前期旧石器問題”と(2)無土器文化の終末と縄文(縄紋)文化の始まりに関する論争だった。いずれも私自身、博士論文や国際シンポジウムを通してかわりを持つことになるが、帰国後まもなくとりくんだのは旧石器(=無土器=先土器)文化から縄文文化に移行した経過についての情報とこれに関する論争の論点をまとめてみることであった。これについて、1964年3月にカナダのハミルトン市で開かれた北米東北部人類学カンファレンスで、「無土器文化から土器文化への移行について」(“Continuity of non-ceramic and ceramic cultures in Japan”)と題する発表をし、同年11月にはデトロイトでのアメリカ人類学会年次大会では「日本における中石器的文化現象」(“The mesolithic manifestation in Japan”)という題名で発表した。

先土器から縄文への移行についての論争の口火となったのは、



▲シベリアの植刃

は、井草・大丸式に続いて2番目に古いとされていた夏島式土器のC<sup>14</sup>年代の公表が発端だったと理解している。夏島貝塚の本調査が実施されたのは1950年3-4月と1955年6月、杉原壮介・芹澤長介両先生の署名入りの報告書(明治大学文学部研究報告 考古学 第2冊

「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」)をいただいているが、1957年12月発行のこの報告書にはラジオカーボン測定のための資料を採集したことや、それをミシガン大学へ送ったという記述はない。報告書の共著者の芹澤長介氏の『石器時代の日本』(1960)によると、夏島貝塚のカキの殻約450グラムと木炭約5グラムを放射性炭素法による年代測定のための資料として1957年の初冬にミシガン大学に送り、1959年6月にその測定結果がミシガンのグリフィン教授から杉原壮介教授への書状で通知されたということだ。カキ殻(M-769)は9450±400前のもの、木炭(M-770, M-771)は9240±500で、夏島の土器は当時としては世界最古ということになった。

縄文遺跡のラジオカーボン法による年代測定はこれが初めてではなく、姥山貝塚の住居址床面から採集された木炭と、加茂遺跡出土の丸木舟の破片について、それぞれ4546±120(C-548)と5100±200(M-240)という結果は知られていたが、姥山は縄文中期、加茂は縄文前期だからC<sup>14</sup>年代はほぼ妥当な数値としてうけとめられていたようだ。これに対して夏島の土器は9000年以上前まで遡るという情報は全く想像外だから活発な論議の対象となるのは当然で、縄文文化(山内氏によれば“縄文”ではなく“縄紋”文化)研究の大御所の山内清男は佐藤達夫との共著の論文(週刊読売1962)その他で、強力な反論を展開している。まもなく夏島式よりも古い形式の土器を出土する遺跡が各地で見つかり、福井洞窟、上黒岩岩陰などでさらに古い計測値も得られたので夏島のC<sup>14</sup>年代はユニークなものではなくなったが、それだけに議論の対象もひろがった。無土器文化の終末期、または縄文文化の初期の遺跡で局部磨製の石斧や円鑿が出土するので山内らは、これらの遺跡は新石器時代に属するものだと言断し、本の木遺跡などで多数に出土する石槍は北東アジアの例を見ると植刃として使われたものと思われるから、これらの遺跡の年代はシベリアのイサコヴォ期4000-3000BCに近いだろうとしている。佐藤達夫がC<sup>14</sup>年代法による年代測定については極めて懐疑的なことは、1964年1月13日付けの書簡で13,000年BP頃のものとして示されている北米のクロビス・ポイントなども、形態から見てC<sup>14</sup>年代の示すほど古いとは思われないといっていることからあきらかだ。日本列島で土器文化が始まった年代について、C<sup>14</sup>による年代によるか、遺物の対比に依頼するかの論争がしばらく続いた。

## 略歴

1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在:ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-79年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 180

## 下右田遺跡 ～山口県防府市～

平井 耕平

私が紹介するのは、山口県防府市に所在する下右田遺跡である。遺跡は、防府平野の北部から南西部を貫流する佐波川右岸の右田ヶ岳・西目山が形成する麓斜面と扇状地上に位置する。周防国府跡から直線距離にして約3kmの位置にある。遺跡の範囲は長さ1.5km、幅0.9kmで、面積は約126万㎡と市内で最大級の規模を誇る。

これまで、中世の農村集落の変遷を明らかにした山陽自動車道建設に伴う発掘調査をはじめ、40回以上にわたる調査が実施されてきた。特に、1990年代後半以降の遺跡北東部における開発に伴う調査では、弥生時代後期から中世の極めて重要な遺構・遺物を確認している。

私が防府市役所に入庁して最初の調査が下右田遺跡で、国指定史跡の大日古墳の南で古墳とほぼ同時期の7世紀前半の竪穴建物を市内で初めて確認した。その後も遺跡北東部の学校建て替えや民間開発に伴う調査では、弥生時代後期から中世までの重複する遺構に四苦八苦しながらも調査を実施し、現在は既往調査の総括報告に関わる整理調査を行っている。

遺跡北東部の遺構・遺物は、以下の3点に集約できる。

- ・ 弥生時代後期～古墳時代前期の拠点集落
- ・ 佐波郡(評)家の可能性がある古代の建物群
- ・ 中世の方形居館と付随する建物群

①では合計1万㎡にも及びこれまでの調査において、約250年間に造営された直径8m超の竪穴建物を100棟以上確認している。調査面積を考えれば、さらに多くの建物が分布することが想定でき、大規模な拠点集落であったと推定している。

②では7世紀～11世紀前半の建物群や製塩土器・鉄製品などが確認でき、佐波郡(評)家の可能性を考えている。③では14～15世紀の方形居館とその前後の時期に分布する掘立柱建物群を確認し、北側に所在する右田ヶ岳城と合わせて右田氏の城館であった可能性を考えている。特に②は、市内に周防国府跡(史跡周防国衙跡)が所在することもあり、国府と郡家が同一市内で、自然境界である佐波川を隔てて目視できない直線距離で約3km離れて位置するという稀有な事例になるであろう。こうした各時代にわたって重要な遺構が密集する背

景には、山・川などの資源に恵まれていることと交通の要衝に位置することが挙げられる。特に、下右田遺跡の北東部は佐波川下流域で最も狭まった場所で、北に断層伝いを抜ければ島根県益田市へ、南は瀬戸内海を隔てて北部九州や愛媛県へ抜けるルート上に位置することが大きな要因と考える。

このように遺跡北東部には重要な遺構・遺物が存在するとともに、右田ヶ岳・佐波川・田園空間が残り、条里地割を引き継ぐ右田地域の「地域らしさ」を残す一帯でもあることから、遺跡と山・川・田が織りなす空間を保存活用したいと私は考えている。一方で、交通の利便性から宅地開発が急速に進行している。こうした現状をふまえ、平成30年度からは遺跡の保存目的調査を始めた。これまで保存目的調査は行ったことはあったが、地権者や地域への説明、保存に関わる専門委員会の運営などのほとんどが私にとって初めての経験である。整理調査を含め今年度の調査では、新たに古代の遺構を確認するとともに、新たな知見を数多く得ている。また、これまで遺跡に関心がなかったであろう地域の方々とも触れ合い、住民が遺跡に関心を持ち始めていることを実感している。こうした遺跡を通じて得る達成感や喜びがある一方で、開発が直前まで迫ってきている現状に直面し、遺跡を保護できるか否かという不安が交差している。

私が防府市内で携わった遺跡は下右田遺跡をはじめ、周防国府跡、仁井令条里跡、車塚古墳、宮市まちなみ遺跡、阿弥陀寺であるが、遺跡の調査は時に私の壁となり時に助け舟となっている。市内には文化財が豊富に存在し、微地形や地名など今に引き継がれているものが多いことも特徴で、遺跡を理解するための要素は至る所あり、文化財を保護する楽しさも難しさも教えてくれる。恥ずかしながら、防府市で文化財行政に携わるようになって、あらゆる角度から「この遺跡がここにある理由(意味)」を常に考えながら調査するようになった。特に下右田遺跡は重要な遺跡であるとともに、入庁以来の私に調査を通じて、重複する遺構を的確に理解すること、微地形や地名などあらゆる角度から考察すること、地域の方々とは歩む大切さ、遺跡を守り伝え活かす楽しさなど多くのことを感じさせ教えてくれる遺跡である。学生時代に言われた「良い遺跡は自分を育ててくれる」「記録保存しかできなかった遺跡はその後の自分の成長によって報われるかどうかだ」という言葉を実感できる充実した日々を過ごさせてもらっている。下右田遺跡は私を育て遺跡の保存と活用へのより一層の活力を与えてくれる存在である。現在の課題は、文化財を総合的に把握する力をつけ、下右田遺跡をはじめ、車塚古墳・周防国府跡・阿弥陀寺といった弥生時代後期～中世の遺跡をどのように繋げ保存活用していくかということである。これらを市民とともに歩む遺跡として、企画や知恵を出し合い喜怒哀楽を市民と共有していけたらと思う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは吉松優希さんです。



▲下右田遺跡第39次調査区より矢筈ヶ岳を望む

## 考古学者の書棚

## 「中国陶瓷見聞録」

ダントルコール著 小林太市郎訳注 佐藤雅彦補注／平凡社(1979) 岡田 章一

本書はイエズス会のフランス人宣教師ダントルコール師が、18世紀初頭に布教のため清の江西省饒州景德鎮に派遣され、当時の景德鎮の様子を本国に書き送った書簡の翻訳である。

ダントルコール師の筆は第1章 序説—中国陶磁器と景德鎮—にはじまり、以下、第2章 胎土、釉料及び成形、第3章 彩絵、色料および施釉、第4章 窯制、装匣及び焼成、第5章 今古瓷説、第6章 結語と続き、康熙末年のやがて最盛期を迎える景德鎮窯業の実態が具体的に、詳細に綴られている。

小林太市郎氏の訳文は極めて流麗で格調高いものであるが、初版の発行が昭和18年、再版が戦後間もない昭和21年であり、この東洋文庫本は昭和21年版を底本としているため、候文で書かれた本文は現代の若い読者にはやや読みづらいかもしい。

本書の冒頭は以下のように始まる。

「拝啓

時折は景德鎮に滞在して新しき信者の心を培ううちに、かの世界各地に伝播して異常なる賞賛を博しつつある美しき磁器の造らるる方法を実地に研究仕り候。もとより、好奇心の心を以て斯かる探索を為せしには非ざるも、併しながら、これ等の製作に関するあらゆる事の詳々詳細なる記述が、ヨーロッパに於いて何かの役に立つべしとは存じ申し候。」

この短い本文に対する訳者小林太市郎氏の訳注は詳細を極め、図版を含め以下5頁にわたって続く。やや長くなるがダントルコール氏の文の最後の部分「もとより好奇の心を以て～何かの役に立つべしとは存じ候。」に対する小林氏の訳注を引用する。

小林氏は先ず、「もとより好奇の心を以て斯かる探索を為せしには非ざる」ことを断っているのは、すなわち好奇心がキリスト教の警むる悪徳の一つたる故である。ことさら神に仕うる身として、宗教のこと以外に好奇の眼を注ぐのは罪であるというのかかれら宣教師の堅き信念であった。」と述べる。

それではダントルコール師はなぜこの書簡を書いたのか。小林氏は言う「ただ宗教の弘布を資くる手段としてのみ、それは許され得たのである。すなわち、中国において布教する為には、その文化をよく理解し、その生活の事情を知悉せねばならない。また、かくして得た中国知識をヨーロッパに紹介することは、やがて中国布教事業に対するヨーロッパ人の興味と支援とを繋ぐゆえんでもある」という考慮の下に、ダントルコール師は、景德鎮において中国磁器を研究し、その結果を故国へ報告したのである。」と。

本書の特徴は本文に対するこの詳細を極める訳注であることは言うまでもない。

訳注の文字数は本文を遙かに凌駕し、さらに東洋文庫版発行に際して、佐藤雅彦氏が有益な補注を施している。

佐藤氏の補注は小林氏の訳注と区別するため、※をつけて施してある。序説冒頭のこの部分には2つの補注がある。

ここでは※2として「磁器」なる言葉について、佐藤氏は「この書では「磁器」と言う語が一般的に用いられている。今の読者には

は目馴れないかもしれないが、中国では、古来この語を、硬いやきもの、あるいはやきもの一般というような意味に常用している。それで、訳注に当たって小林氏もこの語を用いたものと思われる。」と述べている。それでは、「磁器」についての小林氏の見解を見てみよう。

氏は「磁器は普通磁器とも書かれるが、これは磁器を用いるのが正しい」として、その根拠として清の唐秉鈞の『文房肆考図説』や清の朱琰の『陶説』を引用して、磁器とは河北省邯鄲の近傍にある磁州窯の陶器を言うのであって、磁器を指すのではないとしている。

さらに、磁器の定義として、「磁は乃ち陶の堅緻なるものとし、焼成火度が低く、釉が施されているから表面は水を吸わぬけれども、素地には吸水性があり、且つ不透明で濁音を発するのが陶器、これに反して焼成火度高く、素地は半ば熔融して半透明となり、釉はもちろん素地にも吸水性はなく、叩けば金属音を発するのが磁器とすることになる。」としている。

本書を読んだ当時、私は中国の陶器と磁器の違いについては小林氏、佐藤氏の解説によっておおむね理解できた。すなわち、両者は焼成温度と胎土に違いがあり、そのことが原因で硬さや吸水性に違いが表れるのである。

ただ、磁器と磁器の違いについてはやや疑問が残った。

後年、中国語の文献に繩文陶器、弥生陶器と言う表記を見た時、その疑問はさらに深まった。

日本では焼物は土器、陶器、磁器の3つに区分されるのに対して、中国では陶器と磁器の2種類にしか区分されない。したがって、中国の陶器には日本で言う土器と陶器の一部が含まれ、磁器には陶器の一部と磁器が含まれることになる。

そうすると、中国で磁器や白磁や青磁と表記しているものを磁器、白磁、青磁と安易に書き改めるのは誤解を招くのではないかと思ったのである。

その意味で本書の題名を『中国陶瓷見聞録』とし、仏語の「porcelaine」の訳語を磁器としたのは小林氏の卓見である。

私は本書からさまざまな事を学んだ。一つは18世紀初頭の景德鎮窯業の詳細な記録であることは言うまでもない。しかし、それ以上に学んだのは、ダントルコール師の観察の正確で細やかなことと、それを平易な文章で記録し、報告する真摯な態度である。また、その翻訳に当たって小林氏の詳細な訳注とその論拠を東西の文献を渉猟して、そこに求める徹底した実証主義とその博覧強記ぶり、さらには訳語を選ぶ際の慎重な態度である。昔の研究者はと言うより、本来研究者とはかくあるべしと感嘆したことを思い出す。

翻訳が古いため、現在の読者にはやや読みづらいかも知れないが、陶磁器研究のみならず広く考古学に携わる若い研究者に一読を勧めたい一書である。

## アルカ通信 No.187

発行日 2019年4月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp